

皆様、おはようございます。8月最後の週の日を迎えております。あっという間に今年もあと3分の一、あと4ヶ月となりました。ついに広島県、岡山県でも緊急事態宣言が発令されました。1日の感染者数は減っているように思われますけれども、重症者が多くなっており、救急搬送にも大変苦労しており、自宅療養者の数が日に日に増えている現状です。福山市民病院もコロナ関連のベッドがいっぱいになりそうな状況であり、他の救急医療においても逼迫しつつある状況になっていると聞きます。神様のお守りを祈ってやみません。

さて使徒言行録5章の最後のところに入って参りました。

アナニアとサフィラの話がありました。そしてその不思議な業のゆえに多くの人に恐れのお持ちは起こり、民衆は彼らを賞賛し、そして人々は病人を大通りに運び出し担架や床に寝かせ、ペテロの影にでもかかるようにして、病から癒されたいと願いました。そして群衆が病人や汚れた霊に悩まされている人々を連れて集まり、一人の語らず癒してもらい、多くの男女が主を信じその数はますます増えていきました。

そのようなことを背景として大祭司と仲間のサドカイ派の人々は皆立ち上がり、妬みに燃え、使徒たちを捉えて牢に入れ、そして迫害しようとしたがまさにその牢に閉じ込められたその夜中、苦しみと迫害のその夜中、牢の中に主の天使が来て、「夜中に主の天使が牢の戸を開け、彼らを外に連れ出し、

『行って神殿の境内に立ち、この命の言葉を残らず民衆に告げなさい』と言った。」という出来事が起こりました。

そして使徒たちはその通りに神殿に出て行って命の言葉、命の主、イエス・キリストの贖いの死と復活について残らず語りました。

彼らはまた迫害されるかもしれないのに、神殿のところで堂々とまた夜明けまもなく語り始めたわけです。大祭司律法学者たちも夜明けすぐに帰らを牢から引き出してまた迫害し、罰を下し、そして場合によっては命を脅かそうとしていましたが、牢は空っぽになっていました。

それはまさにイエス様の復活の朝の出来事のようにありました。神様に従う正しい人を止めおくことができない、それは墓も牢も同じことでした。

そして神を信じるものは新たないのちの新たな命を得て希望を得て使命を得て出て行くのです。権威者たちは、一体これはどうなることかと「思い惑い」そして「恐れ」それは手荒なことをしたら民衆から石打たれるかもしれないという恐れでした。あんなに偉そうに、使徒たちには誰の権威で、誰の名によって、と尋問するものでしたが、彼らは群衆を恐れていたのです。「ねたみに燃え」、「思い惑い」、「恐れる」。彼ら権威者の中にはそのような感情が渦巻いていました。弱さと恐れと不安がありました。ねたみに燃えながらもどうすることもできない苦しみがありました。しかしそれでもなお彼らは神様に立ち返ることをしませんでした。

そして今日の個所に入ります。自由になって宮で教えていた彼らを再度引いてきて最高法院、サンヘドリンに立たせ、そして大祭司が尋問しています。28節「あの名によって教えてはならないと、厳しく命じておいたではないか。それなのに、お前たちはエルサレム中に自分の教えを広め、あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」これこそが大祭司の懸念してる事でした。

この瞬く間に目覚ましいことが起こって、民衆が皆彼らの味方について、我々の責任を断罪しようとしているんだ。我々を責任負わせようとしてこのように止めて求めてもしつこく活動しているんだ。

尋問している側が実はその心の中に自分たちが責任を取らされる羽目に立たされかねないんだと言うその恐れを持ちつつの、「やるか、やられるか」の意地の張り合いのようなものだと言われれば躍起になっていました。その言葉が口をついてここに出ています。

「あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている。」

しかし、29 節ペトロとほかの使徒たちは答えた。「人間に従うよりも、神に従わなくてはなりません。」

5:30 わたしたちの先祖の神は、あなたがたが木につけて殺したイエスを復活させられました。

5:31 神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。

5:32 わたしたちはこの事実の証人であり、また、神が御自分に従う人々にお与えになった聖霊も、このことを証ししておられます。」

このきっぱりといつものように語る彼らの言葉ですがこの言葉の中には福音があります。「人に従うよりも神に従わなくてはならない。」「あなた方に従うつもりは毛頭ない。私たちの先祖の神、私たちのイスラエルの神はあなた方が木につけて殺したイエスを復活させられました。」完全にこの言葉は権威にあるものに敵対して語られているかのように思われますが、

31 節「神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。」と語るこの言葉、ここに福音があります。

そういう風に皆神の民、イスラエルは迷い、過ちを犯し、罪を犯しました。しかし神はそのイスラエルを、わが民を、悔い改めさせ向きを変えて再出発させ、罪を許すためにイエス様を導き手として救い主としてご自分の右に上げられ今そのイエスキリストを信じる者には悔い改めて向きを変えて出発しようと願う者には罪を許してくださるんだということを彼らは語っているのです。

この事は事実であり、自分に従う人々に神様が与えて下さった出来事、ペンテコステの聖霊の出来事がそれを物語っています。頑なにならずどうか信じていただきたい。プライドにもよらずに、神様がまさに仰せになっていることを、導いておられる事を素直に認めてイエス様を信じてもらいたいと語っているのです。使徒たちは福音(良い知らせ)を語りました。しかしプライドがある大祭司たちは彼らの言うことを聞くことがまたも出来ませんでした。

33 節「これを聞いた者たちは激しく怒り、使徒たちを殺そうと考えた。」と言う事です。救いが、福音が目の前に表されて、神様は裁くためではなく、先に大祭司たちが恐れて言ったように、彼らに責任を負わせようとしているのではなく、その責任をイエスキリストに負わせて、悔い改めの道を開き、悔い改めの後に罪の許しを与えるために神様は偉大な救いを賜った。それをまたも支配者たちは、受け入れることができずに、むしろこの救いの、福音の言葉に激しく怒りそしてこの語った人たちを殺し、自分たちにあくまで都合な事を言う者、身を危うくするもの、目の上のたんこぶに激しく怒りを燃やし、そして人々に慕われているこの妬ましい障害物を取り除くんだ、殺してしまうんだ彼らはまたも新たに神様に反抗して、イエス様を十字架にかけた時と同じ過ちを繰り返そうとしているのです。彼らの立場が、肩書がそれをさせているのでしょうか。悔い改めを邪魔しているのでしょうか。本当に悲しい出来事です。

ヤコブの手紙 4 章にはこのように書いてあります。

4:1 あなたがたの中の戦いや争いは、いったい、どこから起るのか。それはほかではない。あなたがたの肢体の中で相戦う欲情からではないか。

4:2 あなたがたは、むさぼるが得られない。そこで人殺しをする。熱望するが手に入れることができない。そこで争い戦う。あなたがたは、求めないから得られないのだ。

4:3 求めても与えられないのは、快樂のために使おうとして、悪い求め方をするからだ。

4:4 不貞のやからよ。世を友とするのは、神への敵対であることを、知らないか。おおよそ世の友となろうと思う者は、自らを神の敵とするのである。

このように書いてありまして、これは厳しい言葉のようですけどもこれは私たちに真実を突きつけます。何が原因で戦い争いがあるのか。私たちは戦いや争いがない世の中を平和な世の中を求めます。けれどもそれがいざ私たちの心の中に戦い争う欲望が原因だと聞き、自分の願いの為なら人を押し倒しても突き進もうとする私のその我田引水の自己中心の心が世界の破滅をもたらして、自らの破滅をもたらしたのだと迫りくる御言葉を前にして、ああそうだったのかとなかなか認めにくいのが人間の心なのです。

本当に平和を希求してるなら神様の御旨が天でなるように地にもなされることを願うならばと、悔い改めができるに違いないのですけども、いや私の事とは関係ない、他のどこか別のところに原因があると考えのです。悪い人たちが武器をとって戦っており、その人達が悪いのであって私たちが悪いのではない。自分は大丈夫だと決めて戦いや争いが自分の心の中にある欲望が原因だった、この心の中の妬みや自分勝手な心が争いの原因だとは認めたくないのです。誰か他の人を自分たちの生贄にして、自分たちが正しい他の人が誤っていて、自分が正しいんだと意地を張ろうとする、そういう考えを持つのが人間ですけれども、その考えこそが戦い争い醜い悲惨な戦いと争いと人殺しの元凶であると聖書は語っています。

まさに大祭司立法学者たち彼らは「あの男の血を流した責任を我々に負わせようとしている」、目の前にいる小癩な者たち、どこの馬の骨か分からない生意気な奴らが殺しても構わないとして、自分の我を通そうとしています。決して自分は悔い改めをしようと思わず誤っていると自己吟味することなく正しいと信じ、向かってくる敵をなぎ倒して殺しても構わないとする心。これはまさに人間の恐るべき罪の結果であると言わざるをえません。本当に私たちは胸に手を当てて、その自分の思いは、自分の思いは神の前に正しいことなのか悔い改めを前提として考えていかなければどこまでもブレーキの壊れた車が坂道を下っていくようなそういうことにならざるを得ないということをこの聖書の箇所は私たちに教えています。

しかしここに知恵のある一方の教師がいました。

34 節ところが、民衆全体から尊敬されている律法の教師で、ファリサイ派に属するガマリエルという人が、議場に立って、使徒たちをしばらく外に出すように命じ、

5:35 それから、議員たちにこう言った。「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にきなさい。

5:36 以前にもテウダが、自分を何か偉い者のように言って立ち上がり、その数四百人くらいの男が彼に従ったことがあった。彼は殺され、従っていた者は皆散らされて、跡形もなくなった。

5:37 その後、住民登録の時、ガリラヤのユダが立ち上がり、民衆を率いて反乱を起こしたが、彼も滅び、つき従った者も皆、ちりぢりにさせられた。

5:38 そこで今、申し上げたい。あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、

5:39 神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことはできない。もしかしたら、諸君は神に逆らう者となるかもしれないのだ。」

非常に思慮深い、知恵深い、尊敬されているガマリエルの言葉です。後にパウロと呼ばれるサウロもガマリエルの弟子でありました。

ガマリエルはひょっとしたら自分が間違うかもしれないということも考えなければならないということを知っていました。神の前に敬虔で知恵深い学者としてこういう人が学者の中にいたということは、そして尊敬を受けていたということは慰めです。

かたくなな我を忘れて頑固になって怒りに燃えて殺意に燃えて何も見えなくなってしまうている権威者たちの間にこういう神を恐れる人がまだ残っていたのだと言う事は非常に素晴らしいことです。みんながみんな一緒になってカッカしている中であっていやしかし私たちはそこまで万能な存在では無いのではないのか、あるいは私たちが間違っているかもしれないということも考慮しなければならぬのではないのか、と言う人は本当に信仰のある人だと思います。どんなにその考えに勢いがあっても、どんなにみんながみんな賛同していて、異論をさしはさむ余地がなく、どんなに正しいように見えたとしても、権威者にとっておさまりがいいように思われたとしても、力ある者、年長者が立てられたとしても、神様の正義を私たちは全て知り極めていると言う事はできないのです。

「イスラエルの人たち、あの者たちの取り扱いは慎重にきなさい。」「あの者たちから手を引きなさい。ほうっておくがよい。あの計画や行動が人間から出たものなら、自滅するだろうし、神から出たものであれば、彼らを滅ぼすことは(止めることは)できない。」これは実に知恵ある発言、驕りを捨てて、神様を畏れる者の言葉です。

5:40 使徒たちを呼び入れて鞭で打ち、イエスの名によって話してはならないと命じたうえ、釈放した(ゆるしてやった)。

書いてあります。まあ何様であろうかと私たちは思うわけです。

41 節 それで使徒たちは、イエスの名のために辱めを受けるほどの者にされたことを喜び、最高法院から出て行き、

5:42 毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた。

このように脅され鞭で打たれ尋問され取り囲まれ、侮辱され、辱められとしても、彼らは喜んでいました。意気消沈して、青菜に塩とはなっていませんでした。むしろ自分たちは「イエスの名のために辱めを受けるほどのものとされた」のだ、私たちもまたイエス様と共に苦しみを分かちあっているんだ。イエス様と一緒にんだ、それほどのものにされているんだということを楽しんだとあります。彼らはこれこそが私たちがイエス様のお苦しみを共に苦しみを味わうようにさせていただいた特別な名誉であり、私たちはそれに値するだけのものと認められているんだよと、イエス様の名のために辱めを受けるほどのものにされているんだと、本物のとされているんだと感謝しました。イエス様とともにこの道を進んでいるのならば神様の助けが必ず来たり、イエス様の迫害と死と復活にあやからせていただくんだと、確信に満ち、喜んで「毎日、神殿の境内や家々で絶えず教え、メシア・イエスについて福音を告げ知らせていた」のです。

私たちが信仰をもって、確信をもってイエス様を証ししようとするときに、何らかの逆服が吹き、障害が起こることがあるかもしれません。迫害され、妨害され、ののしられ、辱められ、苦しみを受けることがあるかもしれません。それも教会の中でそういう苦しみに会うことになるかもしれません。そういう時に、孤独を味わい、困惑する時に、私たちもこのように喜んでいられるでしょうか。

讚美歌 312 番の「いつくしみふかき」の 3 番の歌詞の通りに私たちは励ましを頂くのです。

「慈しみ深き 友なるイエスは 変わらぬ愛もて 導きたもう 世の友我らを捨て去る時も 祈りに答えて労わり賜わん」

使徒 4:11 この方こそ、／『あなたがた家を建てる者に捨てられたが、／隅の親石となった石』／です。

4:12 ほかのだれによっても、救いは得られません。わたしたちが救われるべき名は、天下にこの名のほか、人間には与えられていないのです。」

本当に世の中で権威者としてあがめられ、奉られている人々の、プライドから来る虚しさ、そして無力を思います。その頑固さの中に責任が問われることを恐れてそしてそこから逃げ惑い、隠蔽し、真実を明らかにせず、そしてどんどん態度を固くして非を認めず、悔い改めず、さらに破滅に落ちていく人たちの姿を今日の聖書の個所に見ました。私たちは聖書にありますように人に従うより神に従いたいと願います。

5:31 神はイスラエルを悔い改めさせ、その罪を赦すために、この方を導き手とし、救い主として、御自分の右に上げられました。

イエス様は私たちの罪の赦しのための導き手、リーダー、創始者、創設者、オリジナルでいらっしゃいます。この方の前にも後にもこの方のような救いはありません。この慈しみ深い、恵み深いお方を前にして、私たちは心を素直にして、いつも心の向きを変えて、方向転換して、悔い改めをして、イエス様に向き直って罪を懺悔し、悔い改め、赦しを頂いて新たに進むことができます。

権威者の人たちから取り囲まれて尋問を受け激しく怒り凄まじい激情に駆られて憎まれ、ひどく怒って殺そうとまで考えられそういう困難の中に立つ時もあるかもしれませんが。しかし私たちは人から出たものではなく、神から出たものです。私たちを滅ぼすものは、止める者は何もないのです。

それでもなおイエスの名のために辱めを受けるほどのものにされたことを喜び、そして私たち向かって吹き荒れるあらゆる境遇、状況、苦しみ、迫害、困難な状況の中にあっても、なお励んでメシア・救い主イエス様についての福音・良き知らせを告げていきたく願います。私たちの使命は他には無いのだと固く信じて、揺らぐことなく進んでいきたいとそのように願います。どんな辱めを受けたとしても恥を受けたとしても、不名誉を受けたとしても、馬鹿にされたとしても、私たちのためにその困難の道、救いの道を進んでくださったイエス様、このイエス様のことを語ったところで無意味だと、やめてしまおうと、意気消沈して思うのではなく、むしろそこまでして私たちを語るべきことを妨害しようとする力が働いているのは、私たちがそれほどにイエス様と共に辱めを受けるに値するものだと考えられているということなのだと言うことを悟り、その同じ暗闇の力からの人々の解放のために、イエスキリストの御名をいよいよ告げ知らせなければならないとの使命感にまた燃やされるのです。